

場における相互性に着目したケアワーク実践

—二者間の介助行為を超えて—

同志社大学大学院博士後期課程 黒田由衣 (007351)

キーワード 生活型福祉施設 ケアワーク 相互性

1. 研究目的

要介護高齢者を対象とする生活型福祉施設において営まれるケアワークは、例えば、食事介助は栄養補給、入浴介助は清潔保持、排泄介助は体内で不要になった老廃物の排出に対する支援であり、どれも身体的ニーズへの支援である。このような介助は、介助を提供する側の行為として論じられることが多い。しかし、介助を受ける側の身体が、その相手に開かれていて、その介助行為を受け入れることができなければ、介助行為は成立しない。つまり、ケアワークは介助者から利用者への一方向的な支援ではなく、互いのかかわり、関係性に基づく相互作用的な営みである。

加えて、自らのケアワーカーとしての実践経験より、これらの介助行為は閉ざされた二者間の関係にとどまるものではないということを感じた。すなわち、食事などの介助行為が食堂や共有スペースなどで営まれることにより、二者間の行為が、他利用者や職員、さらに、さまざまな音や匂いが存在する場が開かれている。

本研究では、自らのケアワーク実践から生じた思いを背景に、生活型福祉施設において営まれる介助行為は、利用者と介助者の相互性を以て成立していることを明らかにし、さらにそれらが営まれる「場」に着目し、ケアワークの意味を捉え直すことを目的とする。

2. 研究の視点と方法

本研究では、生活型福祉施設におけるケアワーク実践に焦点をあて、以下の2つの視点に基づき論ずる。一点目は、介助行為における介助者と利用者とのかかわり、関係性への着目、二点目は、食堂や共有スペース等、介助行為が営まれる「場」への着目である。

研究方法は、文献研究である。ケアの相互性、高齢者の生活空間やケア環境、さらには「場」について論じている文献のレビューを通して、場における相互性に着目したケアワーク実践の新たな可能性を論ずる。

3. 倫理的配慮

本研究は、文献研究であり、個別の事例は取り扱わない。日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、引用・参考文献を明記する。

4. 研究結果

看護学の視点から、丹木(2016)や山口(2014)がケアの相互性について論じていた。丹木は、ケアは自己と他者が互いに生を継続し更新していくための存在の交流であり、その行為は必ず生身の人間同士の相互的な接触という側面があると論じ、山口は看護という営

みについて述べるなかで、看護者から病者への一方向的な配慮や行為ではなく、病者の訴えとケアする側の応答の無限の連鎖によって成立する相互作用の過程であると論じ、両者とも、ケア行為における行為する側とされる側の相互性を強調していた。さらに、介護する・される身体に注目し、ケア現場における具体的な行動を観察した細野（2016）も、介護は職員と高齢者の双方が身体をそれぞれのやり方で動かすことで達成される相互行為と述べ、身体的なかかわりによって成り立つ介助行為の相互性について論じていた。

また、高齢者の生活空間、ケア環境が果たす役割について、社会学者の三井（2012）は、個々のケア提供者の行為や能力を超えた、さまざまな人やモノが織りなすことで生まれる場の力を強調し、ケア行為のみでなく、そこで生活する空間、環境の重要性を示していた。さらに、看護師の立場から認知症ケアについて論じた西川（2007）も、利用者や介助者、家族に加え、その場の匂いや外の景色等も、利用者の穏やかな過ごしをもたらすものとして捉え、環境面からのアプローチの必要性を示唆していた。また、建築学の立場から高齢者の生活空間について研究した外山（2003）も、高齢期の人と住まい・施設の関係性について述べ、その与えあう関係が紡がれる「生活空間」の重要性について論じていた。

本研究より、ケアワークは、介助する側・される側の相互性を以て成り立つこと、さらにその行為が、2者の営みを超えて、場を開かれることにより、ケアワーク実践の新しい可能性が示唆された。

5. 考察

ケアワークは、おもに身体的な介助を通しての、直接的かつ具体的な利用者への生活支援である。今回の研究において、介助行為における介助者と利用者の相互性や、それらが営まれる「場」に着目してケアワークを捉え直すことにより、生活型福祉施設のなかの、様々な人やモノが存在し共有される場におけるケアワーク実践の可能性について示唆した。

今後は「場」のもつ力、すなわち三井のいう「さまざまな人やモノが織りなす関係性」の重要性について、実際のケア場面における具体的な事例やケア現場の職員へのインタビュー調査等を通して、生活型福祉施設におけるケアワークの意義や役割を再構築していきたい。それにより、施設で生活する利用者の社会生活の維持や、社会性の拡大も含む、現場に根ざした社会福祉実践の理論化が可能になると考える。

[参考文献]

- 細野宏通（2016）『介護するからだ』医学書院。
 三井さよ（2012）「第1章〈場〉の力 ケア行為という発想を超えて」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ 境界を問い直す』法政大学出版。
 西川勝（2007）『ためらいの看護—臨床日誌から』岩波書店。
 外山義（2003）『自宅でない在宅—高齢者の生活空間論』医学書院。
 丹木博一（2016）『いのちの生成とケアリング:ケアのケアを考える』ナカニシヤ出版。
 山口恒夫（2004）「第4章 看護におけるケアリング」中野啓明他編『ケアリングの現在—倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて—』晃洋書房。